

## ロマン主義とジャーナリズムの成立

～以下、書評「メディア都市パリ（著者：愛知淑徳大教授 山田登世子）」＜評者：共立女子大助教授 鹿島茂＞（週刊ポスト 91.8.16号）より～  
（・・・・・・は中略部分。太字は引用者によります。）

・・・・・・ナポレオンがワーテルローの戦いに敗れて成立した王政復古の社会は、逆にナポレオン神話をとてつもなく増大させ、多量の「成り上がり願望の青年」を生み出す結果になったが、剣がすでに力をもたなくなったこの時代に、こうした成り上がり願望の青年たちの心を最も引き付けたマーケットといえば、それは、最小の資本でもっとも手っ取り早く「名」を獲得することのできる分野すなわち「文化」であった。・・・・・・十九世紀の代名詞とも言えるロマン主義は、天才や靈感によって彼方の栄光を目指した無償の芸術運動などでは決してなく、なによりもまず、「名」の征服といういかがわしい欲望がプレテクストとして先行する世俗的な現象である・・・・・・。すなわち、**ユゴーもバルザックも、靈感によってペンを取ったのではなく、「ナポレオンのなしたことをペンによってなさん」という上昇願望につき動かされて、紙を黒くしていったにすぎない**のである。ところが、結果的にこの成り上がり願望の青年たちが本当に天才だったため、それに続く青年たちのみならず、御本人までが自分たちを「高貴な魂をもった詩人」と錯覚し、ここにいかがわしい成り上がり願望を心の純粹さと取り違える「ロマン的魂」が成立することになる。だが、この「ロマン的魂」もその錯覚を支えてくれる「言説の市場」つまりジャーナリズムが成り立っていなければ、はじめから存在しえない。なぜなら王侯貴族というパトロンがいなくなった十九世紀においては、自らの文の価値を金に換えてくれるマーケットがなければ「名声」を「富」に代えることはできなかったからである。ところでモダンのみならずポスト・モダンまでも支配することになるこのジャーナリズムも、実はロマン主義と同じく、・・・・・・伝達すべき内容をもった言説（思想）から言うべきことを持たぬ言説（商品）へと、一挙に資本主義の枠内に編入された制度であった。すなわち「一見逆のみぶりによって離反しあうかに見えるこの二つの言説はその実深いところで《いかがわしさ》を共有しあっている。それは《**成り上がり**》ということにつきる」。このように、・・・・・・  
**「市場の中の芸術家」が自らの「文の興行師」となってジャーナリズムという「市場の要請」に従い、文学と呼ばれる「インダストリー」を成立させていった**・・・・・・。